



中高生とともに差別と闘う

『Say no to Racism』

吉成タダシ



「日本サッカー協会には行動規範11カ条というものがあって、その10番目には「薬物の乱用・差別などスポーツの健全な発展を脅かす社会悪に対し、断固として戦う」との項目があるそうです。サッカー選手だけでなく、高校や小中学校、またサッカー協会も進んで、差別ではなく互いにリスペクトし合い、みんなが気持ちよくサッカーができるように力を合わせてほしいと思います。どうかよろしく願います。」

後日、地元紙の読者コーナーに掲載されているのを見つけました。何か反響があるかと思ひ、その後もずっと読者コーナーを見ていたのですが、結局どこからも何の反応もありませんでした。学校関係者やサッカー関係者、教育委員会やサッカー協会の関係者が見てないわけではないと思うのですが…。

日本は単一民族…か？

二十年以上も前の話になります。サッカーU15県代表のヨーロッパ遠征について、報告研修会が開かれたことがあります。そこで、代表チームに帯同した教員から、ヨーロッパと日本のサッカーに対する意識の違いについてお話がありました。ヨーロッパに限ったことではないのですが、サッカーの試合はときとして、国家間の争いの肩代わりをすることがあり、それが原因で事件や戦争のようになった歴史もあるのですが、その根っ子には、「民族の対立がある」と言われたのです。「だ

からサッカーに対して熱い」のだと。そして、「日本がそこまで熱くならないのは、単一民族だからであり、だから日本のサッカーは強くなれない」という趣旨のことを言われたのです。そこで、「待った」とでも言えれば私も格好良いのですが、当時はまだまだ言えるような力も持ち合わせていませんでした。

日本は単一民族なんかではありません。アイヌの方もいれば、琉球にルーツをもつ方もいます。日本国籍であっても、朝鮮や中国にルーツをもつ方もおり、ニューカマーと言われる方々もいる、多民族国家です。また、日本国籍であろうとなかろうと、「民族の対立」がないことを、日本サッカーが強くなれない理由にするべきではありません。それは、日本サッカー協会がめざしている方向性ではないはずで、ちなみに、この発言をされた教員の専門は、社会科です。

まず指導者の人権意識

またあるとき、県のサッカー選抜選手として県外遠征に行ったクラスの生徒が、遠征の翌日に登校してきたときのことです。苦々しい表情で近づいてきたかと思うと、遠征に帯同していた他校のA教員の言動について報告してくれました。遠征用のバスに乗っていると、A教員が、同僚のB教員が取り組んでいる人権教育の批判を始めたというのです。B教員とは、人権教育や部落問題学習に熱心で、校内にとどま

らず様々な場面で表舞台に立つ方でした。生徒は私に連れられ、その様々な場面に幾度となく出向き、人権教育に熱心なB教員に対して尊敬や信頼の気持ちを寄せていたのです。そのB教員のことを目の前で悪く言われ始めたのですからたまったものはありません。よもやA教員も、自分が批判しているB教員を知る生徒が、その場にいないとは思わなかったのでしょうか。それにしても…です。

この件については、後日、県サッカー協会に報告させていただきました。といっても、生徒が特定され、以後不利益が生じないようにするため、詳細は告げず、大枠でしか話せませんでした。したがって聞かされた方も、「あつてはならないことであり、以後気をつけます」と言いつつも、ポカンと口を開けたような状態でした。これも、協会がめざしている「リスペクト精神」に反していますが、それ以前に、人としてどうかという気がします。

Say no to Racism

JFA(日本サッカー協会)のホームページには、壮大な夢や理想、理念が描かれています。

FIFA(国際サッカー連盟)では、メインスローガンに「Say no to Racism(差別にNoと言おう!)」を掲げ、2006年W杯ドイツ大会、ベスト8以降の試合で、このスピーチをキックオフ前に行うことにしました。澤穂希選手が次のスピーチを行ったことは、あまりにも有名です。

「日本代表チームは、人種、性別、種族的出身、宗教、性的指向、もしくはその他のいかなる理由による差別も認めないことを宣言します。私たちはサッカーの力を使ってスポーツから、そして社会の他の人々から人種差別や女性への差別を撲滅することができます。」

この目標に向かって突き進むことを誓い、そしてみなさまも私たちと共に差別と闘ってくださるようお願いいたします。」(日本代表チームキャプテン澤穂希)

であるならば、それをより具現化していくために、協会には是非とも汗を流していただきたい。サッカー人口の底辺拡大、サッカー技術の向上、Jリーグの活性化、代表チームの活躍、等々取り組むべき課題は山のようにあるのでしようが、その中には是非とも、選手・指導者・保護者・サポーターにとどまらず、一般人にも門戸を拡げた、人権研修を開いていただきたい。近年度々起こっている、ヘイトスピーチに乗じたような事件を未然に防止する意味でも、また選手や指導者、サポーターの人権意識を高めるためにも、率先して声をあげていただきたい。そしてそれが地方にも波及し、人権文化に根ざしたスポーツの普及が、すべての人々に行き届くことをめざしていただきたいと思うのです。そうすれば、私の周りで起こってきたような出来事もなくなっていくのではと思うのです。(次回「遊び感覚で広がる差別言葉」)